

コラム農望世間

テーマ： ウォーターフロント グリーンツーリズム

「矢切の渡しから野菊の墓へ」のあらまし

○江戸時代からの矢切の渡し

- ・葛飾区柴又と江戸川対岸の松戸市下矢切を結ぶ矢切の渡し(手漕ぎの渡し船)は、今では東京唯一つの渡しとなってしまった。
- ・今もわずかに残る河川流域の農村風景は、観光スポットとなっているが、同時に歴史的景観を物語っている。
- ・昭和 58 年、日本レコード大賞受賞曲の「矢切の渡し」は細川たかしで大ヒットした。
(つれて逃げてよ～ ついておいでよ～ 夕ぐれの雨が降る矢切の渡し・・・)

○野菊の墓の舞台へ

- ・矢切の渡しから矢切大地へ、そこはアララギ派歌人伊藤左千夫の処女短編小説「野菊の墓」の舞台となっている。(「・・松戸から二里許り下がり矢切の渡しを東へ渡り、小高い丘の上の矢切村と言っている所・・」)
- ・この明治時代の貧しい農村における、15 歳の政夫と 2 歳年上の従姉、民子の純愛と悲劇を描いた小説は、昭和 30 年の木下恵介監督による「野菊の如き君なりき」の映画によって更に感動の物語となった。
- ・矢切の渡しから野菊のこみち、野菊の墓文学碑などの文学散策コースは、いわば文化的景観として今も息づいている。